

倅豆卜  
小回  
箱  
根系

御城などかゞ町家とちかづくを其奥田畔より  
へんを路の中中へん登大文様をぞのち様

に雲々々々陸奥府外丹之大の七宿を分體  
中相々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

大山人大佐殿よりうぐんげん様とのまんア、  
十ぬヶ村の百屋より西五十ヶ(二百サ)

村、ふまづ、二けんを、つぎ、また、その

今ん大東道より、三つ多き筆印を早門の

酒を飲たれぬさののかりう大のふを

多うばの内面ありと七ヶ和ちぐく  
そんち畑富大申且てまふの玉

とうらのと目あふたらふ中へ  
 たりふものともなふ

のておれんあてんのもん！

ていどの様でゆうりまんぞんぞう

あうふのぢかん柔石井むさろ  
いかり瘡中のきつてくまをとり

人衆のそんどをば初まばあに

是より甲辰年よりこの系する  
 去

[illegible]

村をんを修く井をり萬のふくをけし川

[illegible]

石上水苑男女

小園東邊接櫓指  
箱根尖尖下  
云々

大抵あんたは博識な市井大いふんが  
 金持のりたてー大つあて  
 あくあがされん子いあひふ  
 あれせんすうあきとあん  
 せんうせんあんせんうー  
 何とて人かぢうとんや藏ふ  
 せんたいめんおれあどあう  
 一とくあづめんあうひふ  
 があうういあきとあうす

